我孫子市は男女共同参画社会をめざします

男女共同参画情報紙『かがやく』

私のターニングポイント Vol.2

◆特集　「はい」と返事をしてしまって起業　小田麻子さん…P2・3

◆いわき市でボランティア体験をして　森悠子さん…P4

今回は、*コミュニティ・ビジネスという新しい分野で現在ご活躍中の小田麻子（おだあさこ）さんの登場です。

明るくしなやかに、いつも前向きに、チャレンジしながら歩み続けたこれまでをお聞きしました。

地球は、私の仕事場です

一九八一年に大学を卒業したが、四年制大卒女子の就職先は限られていた。男女雇用機会均等法の施行はその四年後である。就職した会社で企画・宣伝部に配属され、会報誌などを担当。そこにはギャラリーも併設されていて、一流といわれる人々と出会うチャンスにも恵まれ、仕事の幅が広がった。

また銀座という地の利から、さまざまな講習会や勉強会に足を運ぶことができた。中でも残間里江子が司会をした十日間連続のトークセッション「地球は、私の仕事場です」に刺激を受けた。ファッションデザイナーのコシノジュンコや評論家の大宅映子といった著名な女性たちが何人も登場して、仕事について意見を交換し合う、いわばシンポジウムだった。「仕事をしている女性は輝いている、素敵！なにより説得力がある！」と鮮烈な印象だった。

主婦歓迎！

五年ほど勤めてから結婚を機に退職した。けれど三か月も家に居ると退屈でしかたがない。大学時代にも、お小遣いを貰わないぐらい、いろいろなアルバイトをした。やはり仕事が好きなのだ。

料理専門の出版社で嘱託社員として二、三年働いた後、今度は出産のため一時休業することに…。やがて子どもが一歳になるころ、「主婦歓迎！」という新聞の求人広告が目に留まりすぐに応募した。締切の前日だった。住宅関連情報誌の契約記者の仕事である。面接では「小さな子どもがいて大丈夫？」と聞かれたり、取材先でも「何だ、女が来たのか…」と嫌味を言われたりしたが、かえって発奮した。男とか女とかは関係なく「仕事で勝負」という厳しい世界で、朝帰りもあり超多忙だった。

我孫子の市立保育園に子どもを預けながら、あるときは時間外保育、それも二次、三次保育に助けられて、夜遅くまで働いた。生活感あふれる主婦目線の記事が新鮮だと賞を受けた。金一封や花束も嬉しかったが、とにかく社会的に評価されるのが励みになって、どんどん仕事にのめり込んだ。親子ともども健康に恵まれ、心よく家事に協力してくれる夫や近くに住む両親にも支えられた。

当初は「女か」と言われもしたが、十七年経って辞める頃には、女性記者が歓迎される時代になっていた。

シティアの「森の中のオープンカフェ」

コミュニティづくり

十年前、大規模マンション・シティアの設計監修者染谷正弘氏から誘いを受けた。氏は、マンションの共用施設を使ったコミュニティ運営の手伝いをする人を求めていた。たまたま知人を介して知り合ったコミュニティ・デザインを手掛ける会社の経営者が、我孫子在住のコーディネーターとして小田を紹介してくれたのだった。市役所に行く程度のお手伝いならと、気軽に「はい」と返事をしてしまった。ところが実際は会社を設立して受注する大きな仕事だった。もう返事をしてしまったし…。

染谷氏は、「建物は単なる箱ではなく、住む人が住みやすく、心地よいことに価値がある」というのが持論だった。考えてみれば、住宅という資産を共有する多くの世帯が集い、あいさつをしたり、ふれあいながら、気持ちよく暮らす。そんなコミュニティづくりはひとつの世直しではないだろうか。ひいてはマンション自体の資産価値を維持することにも寄与する。会社の設立なんて経験はないけれど、えいっと踏み切った。ヌック・コミュニケーションズのスタートである。

我孫子には働く場が少ないと嘆いている優秀な主婦たちがたくさんいる。彼女たちが社会に出るお手伝いができるかな、そんな思いも背中を押した。

わがまち、我孫子

我孫子と都内の往復だけで、自分の住むまちについてあまり考えたことがなかったが、シティアの仕事を通して我孫子の良さに気づいた。人材も豊富で、歴史と文化が豊か、自然の温もりにも溢れているではないかと。

マンションの販売センターには、入居後に役立つよう、地元主婦の生活目線を生かした「まちの情報コーナー」や地域との交流・出会いを意図した「ギャラリー」を設置した。常駐スタッフには、主婦としてのキャリアを買い、PTAの仲間を起用した。入居後も一年半はマンションの敷地内でカルチャー講座、イベント企画などを手伝った。今では住民の自主運営になり、当時より活発に活動がなされている。

仕事を通して与えられた多くの出会いや不思議な縁は、お金には替えられない宝で、仕事だけでなく、生き方そのものを見直すきっかけとなった。

◆特集「はい」と返事をしてしまって起業　小田麻子さん

十年毎にチャレンジ

社会人になって三十年間、わずかな時を除き、ずっと働き続けてきた。二十年前に住宅記者になり、十年前に会社を設立と、十年毎に新たなステージが用意された。その度に素晴らしい出会いと多くの助けをいただいて現在に至っている。大学卒業当時、出版関係の仕事を願ったが、ひたすら前へ前へと夢中で歩いているうちに、思いもかけず設立した会社で、情報誌の編集など自分のやりたいことができるようになった。

これからの住宅は、作れば売れる時代ではない。地域のニーズに配慮し、入居者と地域とのマッチングをはかって気持ちよく暮らす仕組みづくりはもっと重要になるだろう。ちなみに社名にある「ヌック」とは、建築用語で、台所の奥などに設けられた家族の日常の食卓として利用されるスペースのこと。主婦であることを忘れずに仕事をしたい、そして温もりのある居場所をつくりたいという思いを籠めたつもりだ。

実は、小田が以前住んでいた住宅は欠陥住宅だった。そんな体験も住宅の購入者に情報を提供する仕事に熱心になった遠因かもしれない。「転んでもただじゃ起きない」と小田は笑った。

イベント企画中

「はい」と言ってから考える

もう年齢（トシ）だからなんて言わないで！年齢は関係ない、人生は一度きり、だからやりたい事をやりたい時にやればいい。

若い頃に出会ったソーシャル・マーケティング・プロデューサーの澤登信子（さわのぼりのぶこ）さんは、「人には必ずチャンスが訪れる。そのチャンスに気づく人、掴む人、逃す人、いろいろ…」と言った。折に触れて思い起こす。

「頼まれたら、はいと答えてしまう性格なので、失敗など恐れている暇はなく、ただがむしゃらに突き進んできただけだから反省や後悔も人一倍多い」と謙遜する。

これからの夢

山口県に高齢者がシフトを組んで働く「ひかり食堂」があった。お金儲けが目的じゃなくて学食並の料金でお腹いっぱい食べられる、皆に愛される大衆食堂。いくつになっても働く場があり、居場所があるのは素晴らしい。

〝おばばカフェ〟―もちろん客ではなくサービスする側が〝おばば〟なのだが、誰もが気軽に立ち寄れる、そんな場が造れたらいいねと友人と話したりする。

自分もシニア世代に突入し、いままで培ってきたことを活かし、どうしたら社会の役にたてるか、自分に何ができるかがこれからのテーマ。立ち上げたNPO法人もまだまだヨチヨチ歩きの中、これからの十年は、地域を見直しながら、健康でいきいきと、最後まで現役で役立つ人材であることを目指していきたいと言う。

＊コミュニティ・ビジネスとは

地域に密着した事業を展開して、地域の課題の解決や雇用の確保などにつなげる新たなスタイルのビジネス。今までの行政や大企業が提供する商品、サービスとも違って、住民自らが地域の困った問題、または生活の質を上げるような活動をビジネスで展開する。コミュニティ・ビジネスは意義や意味を行動の価値基準にしており、必ずしも利益追求を第一としない適正規模、適正利益のビジネス。株式会社、有限会社、NPO法人などがある。

（市ホームページ参照）

小田麻子

（株）ヌック・コミュニケーションズ 代表

名古屋生まれ。父親の転勤で数回転居。中学1年のとき我孫子に転入。県立東葛飾高校卒業後、立教大学社会学部卒業。1981年、（株）和光入社。その後、料理雑誌の編集業務を経て、（株）リクルートの住宅記者として取材・編集に携わる。2002年、（有）ヌック・コミュニケーションズ設立。2007年、（株）ヌック・コミュニケーションズに社名変更。2009年よりNPO法人テラス21代表理事を務める。

◆いわき市でボランティア体験をして

「ありがとうの輪」を広げたい

３月１１日の東日本大震災では、我孫子市内でも大きな被害を受けました。被害を受けた方々に心からお見舞い申し上げます。我孫子市からも多くの市民が東北に支援に入りました。

ボランティア休暇を取って被災地に駆け付けた、我孫子市役所社会福祉課の森悠子さん（社会福祉士）にお聞きしました。

女性社会福祉士として参加しました

４月と５月、千葉県社会福祉士会からいわき市に派遣されました。３～４日という短いスパンで、被災者の方と人間関係を作ってニーズを聞きだし、支援につなぐことは本当に大変でしたね。

私が女性だったので、被災者が話しやすい場面がありました。海岸沿いの住居がすべて流された集落で、８０代の女性が高台の自宅に孤立していらしたのです。道路が開通してすぐ、男性２人と私と３人で調査に伺い、ドアの傾きなどを直してから、生活状況などのお話を聞きました。食事のこと、水のこと、トイレのこと、男性には言いにくい話を聞けたことはよかったなと思いましたが、その方は話ができたこと自体を喜んでくださいました。そのあとは別のボランティアが訪問を継続していると聞いています。

傾聴ボランティアの役割は大きかったと思います

ボランティアは女性も多かったんです。泥かきボランティアとして活躍する男性や女性。医療・福祉専門職は女性が数多く、避難所をとび回って傾聴していました。被災者の方は、何度も足を運び気持ちを和らげることで初めて出てくる声がありますので、女性の傾聴ボランティアはとても役に立ったと思います。

男女が関わることが大切です

避難所では、更衣室や授乳場所など、わがままと捉えられるのではないかと遠慮して声を上げられない方に、支援者側が気付かないといけないんですね。ボランティアと被災者のニーズの調整にしても、支援は男女両方が関わることが本当に大切だと思いました。

職場の同僚に「ありがとう」

ボランティアをすることは「ありがとうの輪」を広げることだと思います。被災者からの「ありがとう」はもちろんですが、仕事の負担が増えるにも関わらず「頑張って行ってこいよ」と声をかけてくれた職場のみなさんに対しては、「行かせてくれてありがとう」と言いたいし、みなさんの気持ちも乗せてボランティアへ行ってきたと思っています。

「自分にはボランティアはできない」という人でも何かできると思います。いわき市は沿岸部の被害は大きかったのですが、内陸部は無事だったので私はホテルに泊まりました。みなさんも東北に旅行してお土産をたくさん買ってくるとか、ネットで買い物をするとか、小さなことですができることはあると思います。

これからも今の私にできることを続け、「ありがとうの輪」を広げていけるといいなと思っています。今回のボランティア体験は仕事に活かしていきたいと思います。

SPIRIT OF ABIKO Abiko Fusa Arai Kohoku Temmodai
がんばっぺ！我孫子

＝市内のエピソード＝

♡我孫子市では布佐地区を中心に液状化などの被害が出た。「近隣センターふさの風」を避難所にして女性職員を配置し女性の視点を入れ対応した。

♡臨時避難所とした「近隣センターこもれび」に、一人の妊婦さんが駆け込んできた。怖くて一人で自宅にいられないというので床暖房のホールで一晩過ごしてもらった。翌日保健師さんが尋ねたときは安心して帰られた後だった。

編集後記

＊昨年 11 月の我孫子市議会議員選挙で、定数 24 名中、女性議員は４名（16.7％）となりました。平成15年の36.7％と比べると 20 ポイント下がりました。ちなみに国は、あらゆる分野で、2020 年までに、指導的地位に女性の占める割合 30％を目指しています。

＊3.11 東日本大震災から 1 年が経ちます。被災者の方々へのボランティア体験談からは、男女それぞれの立場を理解し、きめ細かい支援策の必要性が提言されています。今年度見直される「我孫子市地域防災計画」に活かされるように！　（H）

■発行：我孫子市　■発行日：平成 24 年２月　通巻 22 号
■編集：「かがやく」編集委員会　我孫子市市民生活部市民活動支援課男女共同参画室　〒270-1192 我孫子市我孫子 1858 番地　TEL：04-7185-1752
地球環境保護のため再生紙を使用しています